

なぜ緑色の信号を青信号と呼ぶのかが話題になることがある。日本で最初の交差点ができたのは昭和5年、日比谷交差点だった。これを報道した新聞記事で、信号機の色は「青、黄、赤」と紹介したものが残っている。「チ」ちゃん」風に言うと、これが信号の緑色を青と言うようになったということになるのか。

信号機の緑を青と呼ぶのは日本の他に例がないそうだ。英語でも青信号は見たまま green light と、青りんごは green apple だ。どれも視覚的には緑色に見えるのだから当然だが。

日本人が緑色を青と表現するのは日本独特の美意識、伝統的に重なり合った言葉の成り立ち、流れを考えなければならぬだろう。色の名前の後に送り仮名「い」が付くのはもともと色彩として使われた言葉である。赤い、青い、白い、黒いがそうだ。

奈良時代以前、色の名は赤、青、白、黒しかなかったと言われている。その前の白と黒は、単純に明るさを表現するもので、明るい、暗いを言ったようだ。緑も大雑把に言うと青の一部に含まれた広範囲の色だった。その名残りとして、緑色のものを青と呼ぶことが習慣として残ったのだろう。

紀貫之の『土佐日記』にも「ところ（黒崎）の名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪の如く」とある。松の葉は緑といわず、青と表現している。貫之の頃も緑も青だったのだ。その青も単にブルーだけでなく、藍色をも含む微妙なものだったらしい。青虫、青葉、青海苔、青りんご、青竹、青汁などあるが、先の青虫などは、単に視覚の色だけを言っているのではないだろう。青は水や空など自然を、さらに爽やか、成長、安らぎを連想させる。

目に青葉山ほととぎす初鰹

山口 素堂

緑色を青色と表現する文化的背景、それと光の三原色と同じ赤、青、緑と呼ぶ方がわかりやすいということもあるのか。

長い歴史を経て、日本人独特の美意識が複雑に成長していったものだろう。「青信号」という呼び方が定着したのもこのあたりにあると思う。